

## 保育者養成課程学生における保育内容「言語」の現状と課題

### － 授業アンケートをもとに指導の在り方を考える －

大橋 英子

キーワード：保育内容、言語、絵本、児童文化財

#### 1. 問題と目的

幼児期における教育について、幼稚園教育要領では「幼児期の教育は、生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」1)と示されている。

保育内容5領域の一つとして位置づけられる「言葉」は子どもたちの言葉の獲得に関する領域であり、平成29年度告示の幼稚園教育要領においては、「経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や表現する力を養う」と明記されている。

また、「言葉」のねらいは、以下の通り示されている。

##### 1 ねらい

- ①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

子どもは、生活の中で、こころを揺り動かされる体験を通して、さまざまな思いを持つ。そして、思いが高まると、自然と気持ちを口に出したり、伝えようとしたりするものである。保育者は、子どもが気持ちを伝えたいような体験ができるような環境構成や援助を心がける必要がある。その体験には、子どものこころの感動が含まれているからである。そのため、保育者は、こころの感動が生まれるのを偶然に待つのではなく、環境構成や援助を工夫することが重要である。2)

領域「言葉」の内容について、保育所保育指針3～12項と幼稚園教育要領1～10項は、教師と保育士等と名称の記述は違うがほぼ同じである。

幼稚園教育要領の領域「言葉」における内容(8)「いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。(9)「絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き想像する楽しさを味わう。」においては、子どもが園生活の中で絵本や物語などの児童文化財に出会っていくことで、様々なイメージを膨らませながら言葉を豊かにしていくことを示している。

絵本や物語は現実とは異なる未知の世界や想像上の世界を味わうとともに、自分とは違う登場人物になりきることで喜び、悲しみ、悔しさなど様々な気持ちの触れることができる。そのような経験をたくさんすることは、現実とは異なる世界を想像していく力を養い、他人の痛みや思いに気づく力を育んでいく。絵本や物語を保育者やクラスの友達と一緒に聞き、様々な感情を共有することは、保育者や友達との交流を深めることにつながっていく。このように、絵本を読むことによって想像、やイメージを豊かに蓄えることは、遊びを豊かにし、さらには、豊かな表現、豊かな人間関係作りにつながっていく。3)

保育現場で関わってきた子どもの姿を振り返ってみると、子どもたちは明るく素直な子が多いが、自分の思いを言葉で表現する力が弱く、友達との関わりが上手くできない子が見られた。また、家庭での子どもの様子は、室内ゲームの遊びが多い傾向が見られ、ふれあい体験も不足し友達関係も希薄な状況にあった。

幼児が自分の思いや考えを言葉で表現したり相手の思いを聞いたりする態度を育むためには、幼児理解を深めながら信頼関係を築いていく中で言葉の感覚を豊かにしていくことが大切である。そのためには、子どもがワクワク・ドキドキと心が揺れ動く体験の中で教師や子どもと関わりを持ち、自分の感動を言葉で友達に伝え、その感動を共有するという体験が積み重ねられることが重要である。また、豊かな言葉の育ちには児童文化財との出会いも大きい。

園生活の中でワクワク・ドキドキと心が揺れ動く体験ができる環境の工夫や保育者の援助が必要で、その一つとして子どもの発達や興味関心に基づいた児童文化財を活用していくことは言葉の感覚を豊かにしていくのではないかと考える。

## 2. 児童文化が保育実践に与える効果

石井章仁共著、中坪史典編著(「児童文化がひらく豊かな保育実践」保育出版社、2009年)は、児童文化について以下のように述べている。4)

「保育実践においては絵本や紙芝居の読みきかせや、ペープサートや人形劇の実演、折り紙や切り紙の製作、劇遊びや表現遊びなど自ら表現したり、わらべ歌や子守歌などに親しんだりと多くの児童文化が根づいています。また、積み木や玩具の素材や絵本に親しむコーナー設定など、文化を育むための環境構成も行われています。子どもの生活そのものが文化活動であると考え、児童文化切り離すことのできない重要な視点となります。保育実践においては子どもと文化との主体的な関わりを大切に、無目的に活動の合間に絵本を提示したり、子どもをまとめる手段としてのみ活用したりしないよう留意する必要があります。

時代とともに変わっていくものと変わらずに伝えられるもの、保育における「新と真」があります。メディアや映像媒体など、常に新しい文

化が登場し、子どもや家庭を席卷する状況で、当然保育の中にも影響を受けるものもあります。保育の中で子どもの文化を大切にはぐくみ、そして子どもや保護者にどの新と真をつたえていくこと、大切な機能なのです。」

と述べている。

保育の現場で毎日、日常的に利用している児童文化財は、子どもの心身の発達において重要な環境である。保護者にも子どもが、児童文化財と出会い、かかわることから言葉や表現力を養い、想像力や感性が育まれていくことを伝えていく必要がある。子どもの心身の発達を促していくにはゲームや情報機器ではなく、児童文化財の活用が必要であることをどのように保護者に知らせていくのか、幼稚園と家庭が連携して取り組んでいくことの大切さを学生に理解させていくことも必要だと考える。

### 3. 実習前の学生の様子から

本学では、1年次後期2月に「保育実習Ⅰ」、2年次前期6月に幼稚園実習と続いて実習を行う。実習に行くと、実習園で必ず必要となるのが絵本や紙芝居の読み聞かせであり、部分実習として行っていかなければならない。1年生の学生は保育内容「言葉」で絵本や紙芝居等の児童文化について学ぶが、普段から絵本や紙芝居に触れる経験が少ないため、絵本を選ぶ段階から戸惑う学生が多かった。例えば、発達段階にあった絵本をどう選

んだらよいのか分からず、絵本自体の内容も十分に理解していない学生もいた。授業の中では、絵本の読み聞かせを体験型として行った。実習では子どもの前に立って行わなければならないため人前で読む経験が必要であるからである。また、同級生たちや教師の前で絵本の読み聞かせをする前に、導入として手遊びをいれることも経験させた。

手遊びについては、言語表現の授業で定着を図るために毎回プリントを配布し、演じながら教えてきた。しかし、同級生や教師の前に立つと恥ずかしさと緊張からか、手遊びでは声がしっかり出ていなかったり表現もぎこちなさがあったりした。絵本の読み聞かせでは、下読みが十分になされていないようで自分のものとして内容を落とし込んでいないため、学生は感情をこめて絵本を読むことの難しさを感じていた。これらは、恥ずかしいという内面的なこともあるが、技術や知識が十分に伴っていない状態でもあると言える。これらは、今後、授業を中心に様々な絵本に触れ、読み聞かせの経験を積むことで改善されていくことではないかと考える。

### 4. 「ぶんぶんひろば」での実践

「ぶんぶんひろば」とは、本学が包括連携協定を結ぶ長浜市の地域課題に貢献する場を学内に設けている子育て支援事業である。また、子ども学科の学生が「ぶんぶんひろば」を通して乳幼児とふれあい、保育の実践力を高める。という目的をもって「ぶんぶんひろば」を年間7回

実施している。昨年の取り組み内容は次の通りである。

回	実施日	主 な 内 容	参加学生
1	4/26	ふれあい遊び	2 年生 A
2	5/24	身体を動かした遊び	2 年生 B
3	7/12	夏の遊び	2 年生 C
4	9/27	さわって遊ぼう	1 年生 A
5	10/25	ミニ運動会	1 年生 B
6	11/29	楽器遊び	1 年生 C
7	12/20	お楽しみ会	1 年生 D



主な遊びの活動内容は、各回ごとに季節感を出しながら変えているが、手遊びや絵本の読み聞かせ、リズム遊びは毎回取り入れている。2 年次の学生は、昨年のぶんぶんひろばの経験があることや、実習Ⅰを終えているため、1 年次のころに比べ絵本の読み聞かせにおいて、発達年齢に応じた絵本を選ぶことはできた。しかし、学生は「同じ月齢でも興味や関心の持ち方が違っていた、そのために、上手く読み聞かせができなかった。」また、「絵本の前に集まってきてしまい、一人ひとりに応じた言葉かけができなかった。」「こちらが笑顔で話しかけると話をしてくれた。」などと振り返っている。

1 年次は発達年齢に合わせた絵本の選びにも手間取り、図書司書や教員らに相談しながら選んでいた。大勢の親子の前に立ち、読み聞かせをすることは初めての経験で緊張や不安などから声が出しきれなかったり、絵本を十分に読み込んでいなかったりしたため表現の仕方も十分ではなかった。学生は「大勢の前で緊張してしまったせいか、子どもが近寄ってきてくれなかった。」「絵本を見ないで違う遊びをしている子にどのように声をかけて、かかわったらよいか分からなかった」とも振り返っている。このように、「ぶんぶんひろば」は座学だけでは学びきれない子どもや親とのかかわり方など実際に体験することができ、貴重な場となっている。

「ぶんぶんひろば」という現場体験から実践を通して学び、また、それを振り返る、そしてまた、実践するという回数を重ねながら学んでいくことは大切なこ

とであり、保育実習前の自信にも繋がっていくと考える。

本学の「ぶんぶんひろば」は子育て支援事業としても定着してきて、年々、親子の参加人数が増えてきている。保護者アンケートから、大変好評で回数を増やしてほしいなどの要求が多いことも明らかになっている。これにより、大学が担う教育資源を活用した支援活動として地域に根ざした活動ができていると考える。また、学生にも実践力の向上が図られる取り組みとなっている。今後も、双方の取り組みや関連性をさらに深め、より実践的な教育的効果の工夫を図っていききたい。

## 5. アンケートの方法

学生が保育者として児童文化の重要性を認識し、実践力を身に付けていくために、1年次の時期にどのような意識や能力を持っているかその現状と課題を明らかにし、今後の指導に向けていきたいと考え本学1年生を対象にアンケート調査を行った。5)

アンケートの質問項目は、次の14項目である。また、⑧～⑭は記述式である。

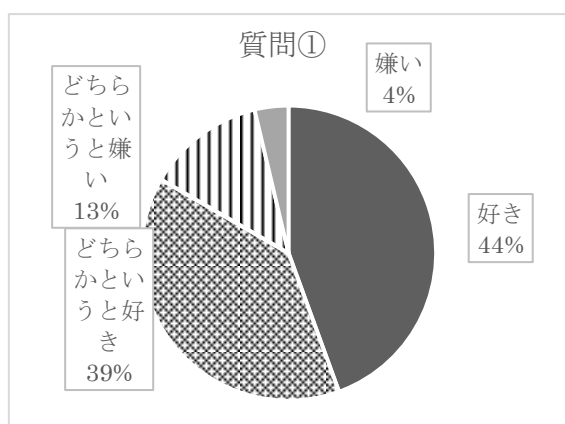
- ① 本を読むことが好きですか。
- ② 文章を書くのが好きですか。
- ③ 人前で話すことが好きですか。
- ④ 人の話を聞くことが好きですか。
- ⑤ 人と話し合うのが好きですか。
- ⑥ 幼稚園や保育園で、先生に絵本などの読み聞かせをしてもらいましたか。
- ⑦ 小さいころ家庭で絵本などの読み

聞かせをしてもらいましたか。

- ⑧ 幼稚園や保育所で保育者が「子どもたちに言葉を指導する」とか「子どもの言葉の発達を援助する」というとどのような事をおこなえばよいと思いますか。
- ⑨ 保育者として子どもたちの言葉の発達を援助する上で、あなたが大切にしたいことや気を付けたいことは何ですか。
- ⑩ 絵本によって子どもはどのように成長すると思いますか。
- ⑪ 保護者から子どもにどのような絵本を選ばいいかと聞かれたらどのようにこたえますか。
- ⑫ あなたは子どもが本好きになるためにはどのようなことが大事だと思いますか。
- ⑬ 手作り人形を作っていた時はどんな気持ちでいましたか。  
演じたときはどのようなことを感じましたか。
- ⑭ パネルシアターやペープサートは子どもにどのような育ちをもたらしますか。

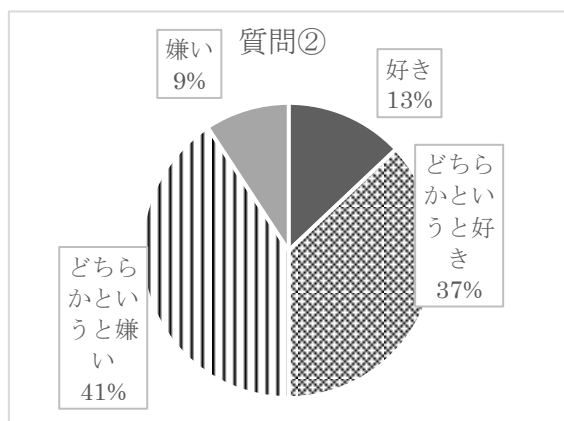
## 6. アンケート結果

質問1では、「本を読むことは好きですか」の質問に対して「好き」「どちらか」というと好き」を合わせると83%と高い結果となった。望ましい事ではあるが、学生を見ている限りでは絵本を読んでいる姿はあまり見られない。今後は、学生自らが絵本と深く関わることが重要だと考える(図1)。



(図 1)

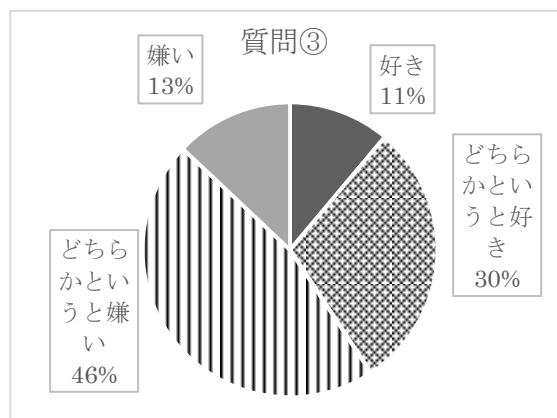
質問 2 では、「文章を書くのが好きですか」の質問に対して「どちらかといえば嫌い」「嫌い」を合わせると 50% という結果となった。実習指導の授業では、指導案作成・実習の記録の書き方を指導しているが、誤字脱字が多く、文章の中に話し言葉になっていることがある。学生自身が非常に文章表現に苦手意識を感じているため、書き方になれるように書く機会を増やしていく必要がある (図 2)。



(図 2)

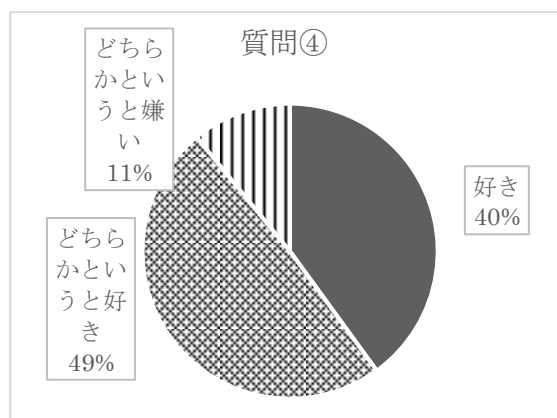
質問 3 「人前で話すことが好きですか」の質問に対して、「どちらかと言えば嫌い」46% 「嫌い」が 13% あわせると 59% であった。人の前に立つことは保育者に求

められることである。体験型授業をする中で経験を積み、表現力をつけていく必要がある (図 3)。



(図 3)

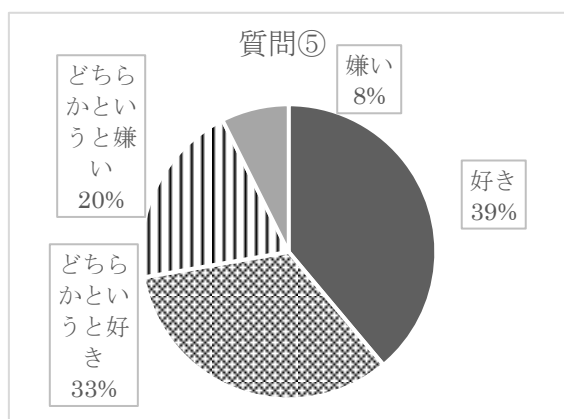
質問 4 「人の話を聞くのが好きですか」の質問に対して、「どちらかという好き」「好き」を合わせると 89% と非常に高い結果となった。保育者としては、子どもの思いをじっくり聞くことが大切であるため良い傾向であると言える。(図 4)



(図 4)

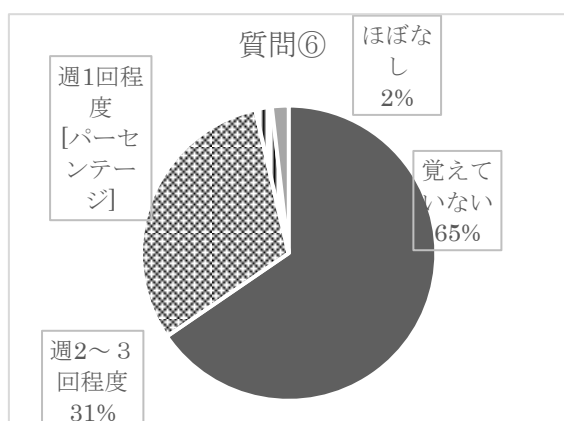
質問 5 「人と話し合うことが好きですか」の質問に対して、「好き」が 39% 「どちらかという好き」33% とこちらも高い結果となった。これは、各教科の授業でのグループ活動の効果が出ているのでは

ないかといえる。(図5)。



(図5)

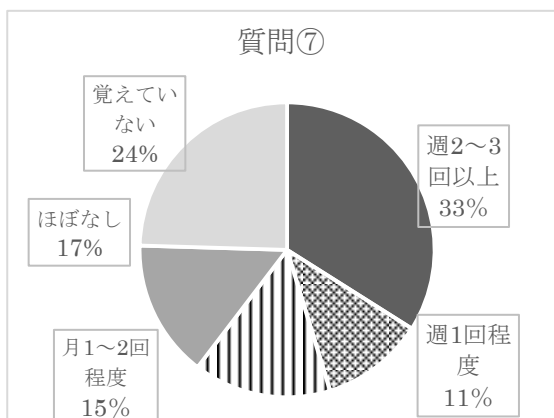
質問6「保育園や幼稚園での読み聞かせの経験について」の質問では、「覚えていない」が65%と、ほとんどの学生が記憶に残っていないことが分かった。保育園や幼稚園において子どもの心に残る絵本をどのように選択していくのか、また読み聞かせでは、子どもの心に残る読み方をどのように行っていけばいいのか、知識や技術面の習得の必要性を考えさせられる結果となった。(図6)。



(図6)

質問7「家庭での読み聞かせについて」は「覚えていない」「ほぼなし」合わせると41%あった。「週2～3回以上読んで

もらった」が33%、「週1回程度」が11%、「月1回以上」15%合わせると59%という結果となった。(図7)。



(図7)

保育園や幼稚園では読み聞かせを行っているはずであるが、学生の記憶に残っていないようである。家庭では、日常的に読み聞かせをしてもらった学生が6割いることがわかったが、読んでもらった経験がない。記憶にないという学生も4割と二分された結果となった。

ここからの質問は記述式となる。

質問8「幼稚園や保育所で言葉を指導する」とか「言葉の発達を援助する」には、保育者はどのようなことをすればいいかの質問では、多くの学生が児童文化財を挙げている。主な回答は、以下の通りである。(複数回答あり)

- ・しりとり・手あそび・伝言ゲーム・ごっこ遊び
- ・かるた・歌をうたうなど。
- ・絵本や紙芝居など積極的に読み聞かせをする。
- ・汚い言葉を使わず正しい言葉を使う

- ・子どもの前で正しい言葉を使う
- ・言葉に関する教材を使って遊ぶ
- ・沢山コミュニケーションとる
- ・自分の意見が言えるようにゆっくりと聞く

その他しりとり、手遊び、言葉遊び、紙芝居、言葉に関する教材を使う、歌を歌うなど児童文化財の活用を挙げている。また、たくさん話しかける、ゆっくり聞く、保育士が正しい言葉を使うなど保育士としての子どもへのかかわり方や言葉のかけ方を挙げていた。

質問 9「言葉の発達を援助する上で、大切にしたいことや気を付けたいこと」の質問では、「言いたいことが言えるまでゆっくり待つてあげる」や「汚い言葉を使わないようにする」また、「言葉遣いに自分が気を付ける」など、保育士としての姿勢・役割を意識した記述をしているのが多かった。以下、その他回答を記載する。(複数回答あり)

- ・汚い言葉を使わないようにする
- ・言いたいことが言えるまで待つてあげる
- ・言葉を使うことができるように遊ぶ
- ・言葉遣いを自分が気を付ける
- ・子どもの気持ちを受け止める
- ・否定的な言葉を使わない

質問 10・11・12 は、絵本についてどのような知識や意識を持っているか質問した。質問 10「絵本によって子どもはどのように成長すると思いますか」の質問では「想像力が豊かになる」、「語彙力が育つ」、「言葉が発達する」など言葉の発達

を挙げているのが多かった。

質問 11「保護者からどのような絵本を選ばいいですかと聞かれたらどのように応えますか」の質問では、「子どもが興味を示した本を」、「年齢や季節に合ったもの」、「お母さんの好きな本」、「日常生活とリンクしたもの」が挙げていた。

質問 12「子どもが本好きになるにはどのようなことが大事だと思いますか」の質問では、「養育者が読み聞かせをたくさんする」、「温かい気持ちを込めて読んであげる」、「本をたくさん置いておく環境をつくる。」ほか、絵本に興味の持たせるには環境面や読み手の工夫がいることを挙げていた。

質問 13「手作り人形の製作時の気持ちと実際に人形を使って子どもの前で演じた時はどのように感じましたか。」この項目については、製作していた時と子どもの前で演じた時の前後の気持ちの変化について質問した。

(製作していた時)

- ・うまく作って子どもたちに喜んでもらいたい
- ・人形を作るのは大変だ
- ・どんな人形だと喜ぶのかな
- ・早く実演したい
- ・難しいな

以上のような、前向きな言葉や不安の気持ちが挙がっていた。



(子どもの前で演じた時)

- ・子どもたちがいろんなことに言葉で応えてくれてうれしい
- ・作って良かった
- ・自分自身が楽しかった
- ・恥ずかしかった
- ・わくわくした表情をしてくれた

このように、不安を持ちながらも子どもの喜ぶことを期待して作っていることがうかがえる。

人形を作り終え、本学の近くにある保育園の園児の前で、実際に演じることを体験したことで、子どもの反応が大きかったことや実際に喜ぶ表情を見ることができたため、「楽しかった。つくってよかった。また、もっと作りたい」など前向きな記述が多かったのではと思われる。

質問 14「パネルシアターやペープサートはどんな育ちをもたらしますか」という質問では、「想像力や言葉の成長につながる豊かな感受性、聞く力」など絵本と同じような意見が多数挙がっていた。ペープサートなどは、子ども自身が演じることがあるため、「子どもが演じられるので表現する力が育つ」「自分なりの言葉をだせる」「どのように作るか考えたりする力が育つ」と挙げた学生もいた。このようなパネルシアターやペープサートの製作、体験型授業での経験から、言葉の発達には絵本をはじめとする児童文化財の重要性を意識した記述となっている。

## 7. 総合考察

アンケート調査①の結果では、学生は「本を読むことが好き」「どちらかというが好き」と答えているのが大半であったが、実際に授業で絵本の読み聞かせをすると、絵本の選択からつまずいている学生が多いのが現状である。1年次2月には実習が始まり、実際に、子どもの前に立ち絵本や紙芝居の読み聞かせをすることとなる。そのため、子どもたちの前に立ち、子どもとかかわりながら演じていくための知識や技術を身に付けていく必要がある。

質問②「人前で話すことは好きですか」では、6割の学生は嫌い、どちらかという嫌いと答えている。人の前に立って話すことに苦手意識を感じている学生が多い。このことは、経験不足から起因していると考えられる。

乳幼児期の発達過程における言葉の環境との関わりや援助において、保育者は重要な役割を担っている。記述式のアンケートでは、学生は絵本が言語発達に大変重要だと記述している。一方で、本学学生は、実践力が充分でないのが現状である。

今後、学生や教員の前で読み聞かせの体験を積み重ねることや絵本をたくさん読むことで感性が磨かれ、自信もついてくるのではないだろうか。実習の場で子どもの前に立った時、大学での実践的な学びが保育現場において活用されていくような授業を展開していきたい。

今回のアンケート調査から読み取れる結果と学生の現状を踏まえ、保育養成に

対する指導の在り方を検討することが重要だと考える。

**引用文献：**

- 1) 幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領, 幼稚園教育要領第2章 ねらい及び内容, 萌文書林, 平成29年3月告示,
- 2) 松川利広, 横山真貴子編著『こどもの育ちと「ことば」』保育出版社, p. 78, 2015
- 3) 徳安敦, 堀科編『生活事例から始まる－保育内容－言葉』青踏社, p. 78, 2016
- 4) 中坪史典編著『児童文化がひらく豊かな保育実践』保育出版社, p. 25, 2015
- 5) 清道亜都子「保育者養成課程学生における言語表現の現状と課題－「保育内容演習(言葉)」の授業アンケートをもとにして－」名古屋女子大学紀要第59巻, p. 315～319, 2013

大橋英子

(滋賀文教短期大学子ども学科教授)